研究・調査報告書

報告書番号	担当
２７６	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門

題名（原題／訳）

Really underage drinkers: the epidemiology of children's alcohol use in the United States.

非常に若い世代の飲酒－アメリカにおける子供の飲酒疫学調査－

執筆者

Donovan JE.

掲載誌（番号又は発行年月日）

Prev Sci. 2007 Sep;8(3):192-205.

キーワード

飲酒、疫学、小学生

要　旨

目的：

これまで12歳以下の子供の飲酒についてはほとんど関心が払われて来なかった。文献もしくはインターネットを検索することにより、アメリカにおける国レベルまたは州レベルの規模で行われた6学年以下の子供の飲酒に関する調査を拾い上げ、子供の飲酒に関する知見をまとめる。

方法：

４つの国レベルの調査と７つの州レベルの調査が子供のアルコールと薬物使用に関する調査として存在している。それらの調査では、これまでどのくらいちびちび飲んだり味を見たことがあるか、これまでちびちび以上に飲んだことが何回あるか、昨年何回飲酒したか、先月何回飲酒したか、先週何回飲酒したかについて調査している。これらのデータをまとめて検討することとした。

結果：

該当する、と答える率は質問項目のレベルが上がるほど減少した（先月何回飲んだかという質問から先週何回？のレベルへ移行するほど該当する子供の数が減る）。飲酒率は年齢とともに上昇し、4学年と6学年の間で2倍になり、5学年と6学年の間で最も大きな上昇を認めた。どの学年でも男子のほうが女子よりも飲酒したことがある率が高かった。これまで飲酒したことがあるかについてはアフリカ系アメリカ人と、白人もしくはヒスパニックでほぼ同率であった。ここ十年ほどの間は、これまで飲んだことがある率もしくは現在飲酒している率は子供の間では下がる傾向にあった。

結論：

どのくらい子供たちが飲酒しているかについて評価ができないと、子供が経験しているリスクのレベルを評価することができない。現在進行中であるこれらの対象集団での飲酒に関する国家的調査は必要であり、子供に飲酒をすすめるようなことがないよう両親を更に教育していく必要がある。